

Title	ローマ皇帝トラヤヌスの東方政策に就て
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.15(179)- 32(196)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0015">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0015</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ローマ皇帝トラヤヌスの東方政策に就て

## 近山金次

Terrarum dea gentiumque Roma,  
cui par est nihil et nihil secundum,  
Traiani modo laeta quam fufuros  
tot per saecula computaret annos,  
et fortem iuvenemque Martiumque  
in tanto duce militem videret,  
dixit praeside gloriosa tali :

“ Parthorum proceres ducesque Serum,  
Thraces, Sauromatae, Getae, Britanni,  
possum ostendere Caesarem ; venite.”

(Martialis, Epigram. XII, 8)

ローマ史を通じてローマの勢力が最も東方に進出した時期はトライアヌスの時代であった。トライアヌスの遠征はチグリス、ユウフラ  
水系流域をトライアヌスのペルシャ湾に達している。その遠征の結果が東西文化の交流にどれだけの影響を與へたであつたか。又は

少くともローマの東方貿易に一時代を劃する大きな事件であった。しかも此の事件はトラヤヌスが耳順の老齢に及んで試みられたものであつた。ローマ帝政に於ける中興の君主として勝利に飾られた其の一生を殆んど終へんとする時期に達しての親征であつた。その遠征は事なればにして皇帝の病死と云ふ痛ましい結果に終つた。トランヤヌスの最後に關する材料は湮滅してゐる。異郷で病死した皇帝の想出を懷しみ、その悲しい最後を忘れてしまはうとローマの人々が故意に然うしたのであらうとさへ一史家は言ふ(M. Reinaud: Relations politiques et commerciales de l'empire Romain avec l'Asie Orientale. p. 228)。その遠征を中心にして彼の東方政策を検討して見たいと思ふのである。

大ローマの統一を完成したアウグスツスの聲望が遠く印度にまでも及んで其の地からローマに使節が来るまではローマの商人にしてアラビヤ地方、ユウフラテス河に至りしものは殆んど無く、エジプトを訪れしものへ極めて少數であり、況んや裏海、印度の地に達せしものは絶えて無かつたと推定されてゐる。

平和と秩序の中にかなりな速度で開拓されて行つた東方貿易はアウグスツスよりチベリウスの治世に及んでいよいよ積極的となり、クラウディウスの時代(A. D. 41—54)に季節風が發見<sup>(註1)</sup>されて此處に劃期的な發展を見せた。ローマ帝國の東方貿易が最も殷盛を極めたのは暴君ネロ(A. D. 54—68)の時代であつたと見る一般的見解は大體に於て誤りが無いものと推察されるが、東方との交易はこれ以後少しも衰へたわけでは無く、マルクス・アレリウス帝(A. D. 161—180)の頃まで間断なく持續せられてゐるのである。ただ其の陸路に於て絶えず障礙となれるバルチャ及び向背常無アルメニヤに對する處置

はローマ帝國に於ける重大な問題として未解決のまま残され、各皇帝はそれべく相應の手段を盡して其の責務を完うせんと努力したのである。とりわけ第二のアウグスツスと呼ばれたトラヤヌス帝の如きは國境問題に於て一層の積極性を示し、ダキヤの平定によつて西方の事態が小康を見るや徐ろに眼を東方に轉じて其の地に横はれる年來の種々な懸案を一氣に解決せんとした。

(註1) この貿易は商品の供給が全く一方からのみ行はれる變則の貿易であつたことを忘れてはならぬ。その結果、専ら購買者であつたローマの貨幣は絶えず印度へ流入することとなり、莫大な富を異邦人の國へ注入する傾向はチャベリウス帝をして痛く貴人の奢侈を憂へしめたものである(Dio. LVII, 15; Tac. Ann. III, 53)。R. Sewell (*Roman Coins found in India*—J. R. A. S. 1904, pp. 593—602, 620—636) その他の研究によればアトレイオス王朝、セリウコス王朝、若くはローマ共和政時代のローマ貨幣が殆んど印度で發掘されず、しかも其の發見は北西部の地域に限られるのに反し、ローマ帝政時代のものは無數の金銀貨が南方に於ても發見せられるのである。なほ又その商品の種類に就て當時の文獻が物語る所を綜合すれば凡そ次の如くである。印度産の獅子、虎、犀、象、蛇等が極く稀に見世物として到來し、鸚鵡も愛好され、象牙、龜甲の類は凡ゆる裝飾品に使用せられて居り、眞珠や支那産の綢布最も多く、胡椒、甘松香、肉桂、小荳蔻等の香料、藥用として干生姜、沒薬、干葡萄、砂糖、蘆薈汁、食用の米、胡麻油、染料として藍、その他綿、黒檀や桃、杏等の果實類から金剛石、瑪瑙、肉紅玉髓、水晶、紅玉、青玉、綠玉、碧玉、蛋白石、柘榴石等の寶石類など最も愛用せられたものである。

(註2) この發見はアルメニヤ及びペルチヤの爲に陸路の不便を感じたことが一つの動機となつたことは否定出來ぬ。即ちローマの商人はエジプトを通過して印度に及ぶ海路に主力を注ぐこととなつたのである。ヨーロッパ人が季節風の知識を得たのは此の頃印度に漂着したプロカムス Plocamus の一人の部下によるとか、或は彼と共に印度からクラウザウスに派遣されて來た使節の報告に基

くとか、或は又印度洋上に於ける印度人やアラビヤ人の會話より之を得たとか種々想像されてゐるが、その發見が果敢なギリシャ人に負ふところ頗る大であつたことは言を俟たば (cf. Plin. Nat. VI, 22—23)。Periplus の筆者が一人のヒッペロス Hippalus なるものに其の發見を歸してゐるのに對し、アリニウスは其の發見を段階的に説明してゐる。

これより先アルメニヤ王チリダテス Tiridates 死する (cir. A. D. 100) パルチャ王パロス Pacorus (A. D. 78—108) はローマの勢威を無視して自分の子エクセダレス Exedares (Axidares) を其の王位につけたのであるが (Dio. LXVIII, 17)，之は先に A. D. 63 にヴォラガセス Volagases 王とネロ皇帝との間に決められた歸約 (Tac. Ann. XV, 24—31) に反する行爲であり、當然ローマの爲政者より糾弾せらるべの性質のものであつたにかからず、トラヤヌスは西方の問題に専念してゐた爲に何事もなし得ず、之を看過したのである。けれども之は何等バルチャの勢力が一層充實し發展したことを物語るものでは無いのである。事實、當時のバルチャは各地に内訌が絶えず、全くの無政府状態を示し、其の勢力は既に幾つかの地域に分割せられてゐたのであつて、ローマ人の接せるものは僅かに其の中の一つ、クテシフォンを中心としてメソポタミヤとアヂヤベネ Adiabene に君臨せる王朝に過ぎなかつた。この分裂的傾向を一層助長せしめるものに新興キリスト教徒と不満のユダヤ教徒があつたことも看過してはならぬのであり、ローマ史家の中にはトラヤヌスの東方遠征の原因をこの宗教徒の鎮定に置くものと居るのである (cf. D. Merivale; Romans under the empire, VII, chap. 65)。その當否は暫くおくとして

も、兎も角、彼が表面上自ら口實とした所のものは何處おどもアルメニヤの王位相續問題であつた。

トラヤヌスが東方遠征に出發したのは A. D. 113 のことである。<sup>(註11)</sup> ネロ皇帝の治下にアルメニヤ問題が落着してより既に半世紀を経過して居り、ダキヤ戦争終了より數えて七年後のことである。

(註11) Th. Mommsen は「トロヤヌスのローマ出發を A. D. 114 と置かれた」 Pedo の時代に據て A. D. 115 の遠征とトロヤヌスの地震の年代とがよく符合することを記載して居る (Provinces of the Roman Empire, VIII, chap. 9)。また Rawlinson (The sixth great oriental monarchy, chap. 18) & Sykes (History of Persia, I, chap. 34) も同説を取つて居るが、これは明らかに誤りである。A. D. 113 の十日には Profectio Augusti の銘ある貨幣が出土して居る事實があり、ローマの元老院がアルメニヤ征服後トロヤヌスに Optimus の稱號をややむけたのである (Dio. LXVIII, 23) A. D. 114 の十日にもう一方 Strack や他の貨幣研究によつて明らかにややむけ居るのである (M. Durry: Le règne de Trajan d'après des monnaies—Rev. his. 16)。

A. D. 113 の秋トロヤヌスはアテネに於てペルチャ王コスロエス Chosroës (A. D. 108—130) の使節を迎へ、其の使節は先づエクセダンスの退位を報告して和を請ひ、其の弟に當るペルタマシリス Partamasiris をアルメニヤ王に推薦して皇帝の裁可を仰ぐこと、且つ夥多の獻上品をもたらしたのであつた (Dio. LXVIII, 17)。若しトロヤヌスの目的が何處までローマ帝國の權利を主張し、其の名譽を明かにやむべくであつたならば此處に於て其の要求の凡ては達成せられたものと見なければならないのであるが、實際に於て皇帝の態度は之により僅かも軟化すること無く、其の獻上品を拒けると共に使節に對する返答も差控へてゐるのである。トロヤヌスのアルメニヤ討伐が果して、ヂオ・カシウス

Dio Cassius の記する如く (LXVIII, 17) 皇帝の光榮を求むる心から出たものであつたか何うかは問題であるとしても、討伐は明かに一つの單なる口實であつて、皇帝の企圖した所は更に別なものであつたことは前後の事情よりして推察に難くないのである。

トラヤヌスはアテネより小アジャ、リキヤを通つてシリヤに渡りアンチオキヤに達し、同地にて冬營すると共に翌年の遠征への準備に忙殺された。この間バルチャに服屬するオスロエネ Osrhoëne の王アブガル & Abgarus は早速トラヤヌスに使を派して友誼を求め、次いでアルメニヤ王バルタマシリスその他各地の王侯も同じく之に倣つた。翌 A. D. 114 トラヤヌスの軍はユウフラテスを遡つてアルメニヤに入り無抵抗のままでアルサモサタ Arsamosata, サタラ Satala を陥れ、エレギヤ Elegia ではアルメニヤ王バルタマシリスの歸順を受けるとふふ様なわけで此の遠征は誠に幸運な順調なものであつた。此時アルメニヤ王は宛も降服者の如くローマの陣中に迎へられたのであり、その諸々の要求も盡く拒絕せられて、トラヤヌスはただ冷やかにアルメニヤがローマの統治に所屬すべものなることを答へたのみであつた。かくてアルメニヤを平定したトラヤヌスはその翌年の末までにエデッサ Edessa, バトナエ Batnae, リシビス Nisibis, シンガラ Singara 等を含む北部メソポタミヤの地方を殆んど全部その勢力下に入れてアンチオキヤに歸つた (Dio. LXVIII, 17—23)。

この冬營中に驚くべく一つの地震が東方を訪れ、倒壊せる都市數を知らず、無數の死傷者を出し、ア

ンチオキヤもそれが爲に廢墟と化してトラヤヌスは少からぬ打撃を受けたのであるが (Dio. LXVIII, 24—25)、なほ遠征の志を棄てず、A. D. 116 の春シリヤを離れ、ニシビスに冬營して遠征準備に怠り無かつたローマ軍を指揮してアザベネに入り、ニヌス Ninus アルベラ Arbela, ガウガメラ Gaugamela を陥れ、南下してバビロンを廻り、クテシフォンに入った。更に南ペルシャ灣頭に出て印度行航の船舶を眺め、アレクサンデル大王の夢を追ふて自分の老齢を喟つたことは有名な話である (Dio. LXVIII, 26—29)。ところがバビロンに歸還したトラヤヌスは容易ならぬ事態を耳にしたのである。殆んどこれまで無抵抗に降服した諸々の地方が盡く謀叛してローマの駐屯軍を或は追放、或は虐殺したことであつた。皇帝は急遽、軍隊を分遣してニシビス、エデッサ、セリウキヤを抑へると共にパルチャ人パルタマスパテス Parthamaspates を王位につけた。歸途 (A. D. 117)、ハトラ Hatra の攻圍に失敗し、ユダ人謀叛の報を憂慮しつつシリヤに還つた。トラヤヌスは更に試みるべく遠征の準備中、病にかかつてイタリヤへ歸國の餘儀なきに至り、かくてアルメニヤ、メソポタミヤ、バルチャに於けるローマ軍の遠征は事實上失敗に終つてしまつたのであつた。トラヤヌスは歸國の途中、キリキヤのセリヌス Selinus で年六十六歳を以て死んだ (Dio. LXVIII, 30—33)。  
(註四) ペルチャは直ちにペルタマスパテスを退位せしめ、ローマの勢力より獨立するに至つた (Dio. LXVIII, 33)。

『トラヤヌスの東方遠征は華やかではあつたが完全な失敗であつた』と云ふのが通説である。しかし

之のみにてトラヤヌスの遠征が説明し盡されたと言へるであらうか。ローマ帝政に於ける中興の君主トラヤヌスが勝利の榮冠に飾られたその一生を殆んど終へんとする老齢に達しながら、なほ且つ東方遠征を試みるに至つた事情はトラヤヌス個人の名譽心によつて説明し得るほど簡単なものでは無かつた様である。ローマでは A. D. 113 の秋十月に此の遠征の門出を記念して Profectio Augusti と銘を打つた貨幣が發行されてゐる。トラヤヌスは今まで幾度か遠征の旅に上つたけれども斯うした前例は一つも見あたら無い。特に此の度の出發が記念されたのは常人が軍務を退くべき耳順の齢に達しながらトラヤヌスがなほも大軍を指揮して國事に盡瘁するその勞を讃えたものであつたに違ひ無い。トラヤヌスをして其處に至らしめた事情は一つの興味ある問題であると言はなければならぬ。吾人は此處に於て暫くローマ帝國傳統の東方政策に就て検討して見たいと思ふのである。

(註五) Dio の史的價値を高く見る一部の史家は Gibbon (Decline and Fall of the Roman Empire, I, 1) をはじめ凡て此の立場を取つてゐる。その Dio が図書の中や (LXVIII, 23) トラヤヌスの性向に觸れて、皇帝が Optimus と云ふあだ名を最も愛好した、その理由はその名が彼の武名を示すことなく寧ろその人格を敬稱したものであつたからによる、と記してゐることなど此の場合特に想起すべきであらう。

アウグスツスの帝國統一の頃より既にローマの東部國境に於ける勢力はシリヤ、カパドキヤ、アルメニヤを包括してチグリス、ユウフラテス兩河の流域に及びパルチヤ王國と對峙してゐた。從つてローマ

帝國の東部國境はパルチヤの勢力に對する緩衝地帶としてメソポタミヤの砂漠とアルメニヤの山地を有ち、そのうちメソポタミヤの砂漠は地理上パルチヤの勢力下にあり、ユウフラテス河を以て國境線を構成することは當時の凡ゆる事情よりして極めて自然なものであつたらしく、史上ローマにせよパルチヤにせよ一時の勢にまかせて此の河を越えて他の領域に侵入したものは必ず其の結果に於て失敗を繰返してゐるのである。それ故、ローマ帝政成立の頃より、此のユウフラテスの國境線は兩國により殆んど決定的なものとして考へられて來たのである。然るに兩河の上流に位するアルメニヤは小アジヤのポンツス、カパドキヤに直接隣するところから國防上極めて重要な地域であつたのみならず、アルメニヤの商人はコーカサス山脈を越えてスキタイ人と、裏海を渡つて中央アジヤ及び支那と、チグリス河を下つてバビロニヤ及び印度と交易があり、海路をエジプト人、アラビヤ人により、陸路をシリヤ人とパルチヤ人によつて獨占されてゐた當時のローマ帝國にとつては唯一の東方進出の足場であつた關係もあり、ローマは既に共和政時代より此の土地を己が勢力下に置いて國境防備を安泰ならしめることを國策としてゐたのである。斯くてアルメニヤは政治上からすればローマに服屬の形をとつてゐたけれども地理的には全くパルチヤと同じで風俗も之と異なる所無く、互に通婚し、共通の言語、宗教を有してゐた。小アジヤの地方と異つてギリシャ文化の影響を受けず、ローマの地方制度も此の地に施かれたことは無かつた。更に又パルチヤとしてもアルメニヤは國防上極めて重要な土地で、若しこの地に有力な敵國が生ずれば

封建的國家としてのパルチヤは直ちに其の國威を脅されるのであり、従つて東西の勢力は常に此の地で其の支配權の争ひを繰返すと云ふことになつたのである。しかも異民族としてアルメニヤ自體がローマの統治に對し抱いてゐた反感は相當に根強いものであつたことを忘れてはならぬ。チベリウス、ガイウスの二將がアウグスツスの治世を通じ、更にチベリウス帝の治下にあつてはグルマニクス、ヴィティリウスが各々其の力を盡した東方政策なるものは單に對パルチヤの問題に止まらず、アルメニヤ内部の謀叛に對する困難な制壓を含んでゐたのである。爾來ローマの東方政策はカリグラの治世 (A. D. 37—41) に一時亂れただけども其の後は常に此の方針を踏襲し、大體に於て誤りが無く成功したものと言へるのである。ネロ皇帝の治世に於けるアルメニヤ討征が成功してからは、同地方は全くローマの勢力下に置かれ、その後ユウフラテス上流域もコマゲネ Commagene 地方まで平定されてサモサタ Samosata とメリテネ Melitene には國境警備の軍團が配置されてゐたものの如くである (Joseph. Bell. Jud. VII, 7; Suet. Vesp. 8)。

この頃チグリス、ユウフラテス兩河の地方は東西貿易の要路として異常な發達を見せてゐた。土着のバビロニヤ人に加ふるにギリシャ人あり、ユダヤ人あり、メヂヤ人あり、パルチヤ人ありと云ふ有様であった。抑々西方文明の勢力が積極的に此の地方に進出することになつたのはアレクサンデル大王以後のことであり、北シリヤに君臨したセリュコス王朝 (312—65 B. C.) の下にギリシャの勢力はアンチオキ

ヤ、アパメヤを中心として發展し、西は小アジャの軍事上商業上の要路を抑へ、東はチグリス河畔のセリウキヤに及んでゐた。殊に東方の經營は歴史的傳統を有する文化の中心地であつたが爲に困難を極め、チグリス、ユウフラテス兩河に沿つて軍事的植民地を置きアンチオキヤとの連絡を圖るのみでも其の努力は決して小さなものでは無かつた様である。前二世紀に入つてパルチャの勢力が强大となるに従ひ此の連絡は中斷せられてセリウキヤは孤立に陥り、從つて同地に於けるギリシヤ文化の勢力は衰運を辿らざるを得なかつたのである。一方に於てローマの東漸力は明かに初めのうちこそ反ギリシヤ的であつたが、ポンペイウスのシリヤ併合(65 B. C.)の頃より其の政策に急激な轉換が見られるのであつて彼等は俄かにギリシヤ文化の支持發展にとどめると云ふ立場を取ることになつたのである。それ故、ローマの東方政策は爾來その地にあるギリシヤ諸都市及びギリシヤ人を擁護して地中海文明の進出を圖ると云ふ事にあつた。パルチャ國力の減退に伴ひシリヤに君臨せるローマの勢力はギリシヤ商人の背後から漸く兩河地方にまで進出してパルチャ商人の勢力と拮抗し、ペルシャ灣から印度へ通ずる商路の發展につとめることとなつた。そのローマの勢力を最もよく代表してゐた商業都市はチグリス河畔のセリウキヤで人口六十萬を有し(Plin. Nat. VI, 26)、三百人の元老と民會とを有して野蠻なパルチャ人を輕蔑してゐたと記されてゐる(Tac. Ann. VI, 42)。このセリウキヤに對するものとしてチグリスの對岸にパルチャの商業都市クテシフォンが存在し、パルチャは大いに其の發展に腐心して姉妹都市のヴォロゲソケルタ

Vologesocerta を建造したり、クテシフォンを擴張せたりしてゐるのである (Plin. Nat. VI, 26; Am. Marc. XXIII, 6, 23)。老プリニウスが *Inter duo imperia summa...prima in discordia semper utrumque cura* (Nat. V, 25) と評した殷盛なペルミアを北にひかへ、南にカラクス Charax, ヘボロニア Apologos の商港を有するこの地方の商業は當時相當な繁榮を見たものの如くである。支那の魏略や後漢書に見える盛大な交易の記事は疑も無く此の當時に於ける之等の地方の模様を物語るものなのである。

A. D. 106 トラヤヌスがダキヤ遠征よりローマに凱旋して未曾有の祝典を催され、世界の各地から幾多の祝賀の使者を受けた際に（競技が四個月續行され、一萬人の闘技者がアレナで斃れ、一萬一千の野獸が試合で殺された）印度からも使者の到來を見たことが史書にも見え、皇帝の威名は當時の世界に於て相當大おほく廣範圍に及んでゐたことが推察されるのである (Dio. LXVIII, 15)。兎も角、この年ローマはシリヤ邊境の地方をも平和裡に併合して其の東方に於ける權益を確固たるものたらしめた (Dio. LXVIII, 14)。最も最後に残れるユダヤ人の王國として今まで屬國たりしダマスクスの地方は併合され、ボストラ Bostra, プトラ Petra は完全に占領され、ナバテア Nabataea 王國の大部分もアラビヤ地方としてローマの一屬州にされた。<sup>(註六)</sup> この際、隊商の往來する要地であるデュベル Diebel, ドルズ Druse, ホウラ Hauran その他ヨルダン彼岸の諸都市がその中に包括せしめられたことはロストフチツヒ Rostov-chef も説く如く其が政治的軍事的見地からと云ふよりも商業的經濟的立場からなされたものであつたこ

とを物語るものであらう (La Syrie romaine—Rev. his. 176, p. 9)。かくてローマは東西の世界を結ぶ重大な商路にあたる地域を完全にその勢力下に入れたのである。その結果として從來のローマとパルチャとの關係が著しい變化を受けるることは當然の話であつた。たまたまアルメニヤの王位相續の紛争が再燃して其が問題解決の端緒となつたのである。

(註六) R. P. Longden は當時ダキヤの Decebalus とパルチャ王バコルスとの間に協約ありしことを擧げて此のローマ軍のアラビヤ併合の一つの動機として第一回ダキヤ戦役に於けるパルチャ商路の封鎖を想像してゐる (Cambridge Ancient History, XI, chap. VI, 2)°

ダキヤ平定を終へて既に七年、西方の外交、内政に於て完全な成功と感謝とを得たトラヤヌスがアルメニヤ問題を動機に軍を起して長年の懸案たる東部國境の問題を解決し、かたがた此の商業區域の観察を行はうとしたことには何等の不思議も無いのである。トラヤヌスが當初から東方に關する乏しい知識に頼ることなく、姑息な一時的手段を避けて徹底的な解決を企圖してゐたことは其の遠征を通じて彼の取つた行動 (アルメニヤの使節に對する拒絕、アルメニヤ征服よりパルチャへの侵入、天災に處しての不動の決意、ペルシャ灣への進出、病に計劃が挫折するまでの積極的な態度等) よりして明白な事柄である。

トラヤヌスの東方遠征は皇帝の病歿によつて挫折し、それが爲に東方の問題は未解決に終つたが、そ

の後繼者ハドリヤヌス、アントニヌス兩帝の消極政策によつては事態は少しも改善されなかつた。結局マルクス・アウレリウス帝の遠征となり、セヴェルス帝の討伐となつて積極政策が實を結び、アルメニア、メソポタミヤ地方の完全な併合を見るに至つたのである。トライヌスの遠征がモンゼンの主張する如き軍事的見地からチグリス國境線を目指して試みられたものであるか何うかに就てはなほ議論の餘地があるとして（*Provinces of the Roman Empire*, VIII, chap. 9, pp. 70—71）、この遠征によつて東部國境に於けるローマ勢力の強化が行はれたことは間を俟たぬ所である。それと同時に東方第一の強國としてローマと共に世界を分つと言はれたバルチャ（cf. *Justinus*, XLI, 1）が初めてローマ軍の爲に蹂躪された事實はローマ人の心に大きな影響を與へずに置かなかつた。ローリンスンの主張せる如く一つの重大な事柄としてバルチャの衰微が西方の世界に廣く知られる様になつたことを忘れてはならぬ（*The sixth great oriental monarchy*, XVIII, p. 316）。

それから又トラヤヌスが此の遠征を商業發展の意味からも多少考慮してゐたことは推察に難く無いのである。ローマ時代の印歐貿易の發展を考察してトラヤヌスの遠征に及べば何人と雖も（一）ローマのバルチャに對する關係と印度使節の來訪（II）印度の資源と季節風の發見による交易の發達（III）スタチウス *Statius*, マルチアリス *Martialis*, プリュタルコス *Plutarchus* に現れた當時のローマ人の東方觀（Stat. III, 3; 4, (57—63); IV, 1, (40—2); 3, (155); Mart. XII, 8; Plut. Pomp. 70）等により其

の遠征が影響を受けてゐると見るべきが妥當であることを感ずるであらう。そして又この意味からすれば彼の遠征は相當の效果を生んだものと言ふことが出来るのである。即ちアラビヤの商業都市パルミラが東西貿易の中心地としてローマの保護の下に最も殷盛を極めたのはハドリヤヌス、アントニヌスの時代であつたことを先づ想起すべきである。プリニウスの記事 (Plin. Nat. XII, 18) によれば『インド、支那、アラビヤへローマ帝國から輸出する貨幣は最低額に見積つても毎年一億 Sesterces に達す』とあつて、東方貿易が相當盛大であつたと思はれるのに、當時の文献に現れた東方の地理的知識は比較的簡單で漠然として居り、プリニウスではへも之を嚴密に批判すればアウグスツス時代の知識を殆んど越えてゐないと云ふ様な事實からローマ人と東方人（少くとも支那人）との直接交通は甚だ稀であつたと推察されるのである。又前に述べた支那の史書には太秦のことを記して興ニ安息天竺ニ交ニ市於海中ニ利有ニ十倍……（中略）……其王常欲通ニ使於漢ニ而安息欲下以ニ漢繪綵ニ興ニ之交市上故遮闕不得ニ自達ニとあり、當時バルチャ、インドと直接交渉のあつたローマ商人が支那との交通を切望してゐたことが知られるのである。それがプトレマイオスの地理誌になるとバクトリヤから葱嶺を越えて後漢の洛陽に至る道程地名を頗る詳細に記載してあつて (Ptol. Geog. I, 11—12; VI, 13, 15—16)、ローマと此の方面との交易が紀元一世紀の中頃から二世紀の前半に亘つて相當の進展を見せたことが認められるのである。後にパウナニヤス Pausanias に詳細な生絲の知識<sup>(註セ)</sup>を與へたと言はれるローマの使節が漢にまで派遣されて來た

のは丁度その頃まで殷盛であつた陸路がペルチャ戦役 (A. D. 162—165) のために閉鎖されたので海路による支那との交易を開拓しようとした目的からであつたと想はれてゐる (cf. J. G. Frazer : Pausanias's Description of Greece, VI, chap. 26, 6)。これ未曾有の事柄であり、ローマの東方貿易が當時相當の重要性を有してゐたことの證左と思はれるし、トラヤヌスの東方遠征以來ローマの東漸力がかなりな積極性を示せり。一面を物語るものなのでは無からうかと考へられるのである。なほ又印度北部のショララバーム Jellalabad に於てはドミチャヌス、トラヤヌス、サビナの金貨がカドフィセス二世 Kadphises II, カニシカ Kanishka, フヴィシカ Huvishka の貨幣の多くと共に見出されるのであり、印度の東岸に於てもトランヌス、ハドリヤヌス時代の貨幣が見出される等の事實よりしても既にその遠征の效果を無視するには大なる誤りであると想はねばならぬ (Sewell : Roman coins found in India—J. R. A. S. 1904, p. 620, 630)。

(註七) ヴィルギリウスは支那人が樹の葉から生絲をとるんとを語り (Georg. II, 121) や後の詩人等もクラウディウスの頃までも話を歌ひ傳へてゐるのであり、プリニウスの知識も之を出ぬのであるが (Nat. His. VI, 54)、ペウサニヤスは之に就てかなり詳細な而も正確な知識を有してゐる (VI, 26, 6—8)。

要するにトランヌスの試みた所のものは曾てケーサルの行はんとする経略であつて、東部國境の強化と東方貿易の發展とに大きな足跡を残さずには置かなかつた。彼の遠征を單なる名譽心の事業、完全な

失敗の試みとして簡単に記述するには容易である。しかし世界史の上には表面上、事件そのものとしては明かに失敗して居つても、其の興へてゐる深い大それな影響を忘れてはならぬ事件が數多くあるのである。このトマヤヌスの東方遠征その様な一つの事件であつたと信じることが出来ようと思ふ（一九三七・11・1 H）。

Trajanus の紹介に纏わる資料は比較的貧弱である。Tacitus の名筆は A. D. 96 Domitianus の死を以て終り、Suetonius も同様 Domitianus に当り、Historiae Augustae で Hadrianus 帝に始り、東方に最も遼闊の深みの Ammianus Marcellinus の史書も甚だしくないが前半が缺失してゐる。帝政史としては僅かに問題の Dio Cassius あるのみである。かのローマ記念柱は Dacia 征伐の貴重な史料たるに当り、又ハ Plinius も皇帝の性格その他に就て貴重な材料を提供している。これは東方遠征直前からあるので、皇帝の東方遠征に纏わる直接の資料は頗る貧弱なものである。又ハ紳人は當時 Statius, Martialis 等の詩人は勿論、Fronto & Josephus の史書にも助力を求める。又その前後の大 Plinius, Ptolemeus, Strabo, Periplus, Pausanias 等の既れた地理的知識を参考し、最近に於ける幾何学的考證、貨幣研究などもまた参考になつた。参考文献には Albertini, E.: L'empire romain, 1929; Baker, G. P.: Twelve centuries of Rome, 1934; Benjamin, S. G. W.: Persia, 1891; Cambridge Ancient History, XI (Imperial peace A. D. 70—192), 1936; Cambridge History of India, I (Ancient India), 1922; Capes, W. W.: Roman Empire of the second century, 1889; Chapot; Roman World, 1928; Charlesworth M. P.: Trade-routes and commerce of the Roman Empire, 1926; Durry M.: Le règne de Trajan d'après des monnaies (Rev. His., 196); Ferrero G. & Barbegal C.: Short History of Rome (Empire 44 B. C.—476 A. D.) 1918; Frazer J. G.: Pausanias's Description of Greece, IV (1913); 鎌田勲八博士「東西交渉史の研究」(昭和元年) Gilmore J. E.: Babylonia under the Greeks and Parthians (Eng. His. Rev., 1892); Hermann A.: Die alten Seidenstrassen

- zwischen China und Syrien, 1910; Hirth F.: China and the Roman Orient, 1885; Jones H. S.: Roman Empire (B. C. 29—A. D. 476), 1916; Justi F.: Geschichte des alten Persiens, 1879; Longperier: Mémoires sur la chronologie et l'iconographie des rois parthes Arsacides, 1853—82; Merivale C.: Romans under the empire IV (1856), VII (1862); Mommsen Th.: Provinces of the Roman Empire, II (1886); Morgan J. de: Histoire du peuple arménien depuis les temps les plus reculés de ses annales jusqu'à nos jours, 1919; Niebuhr B. G.: History of Rome V (1844); Oxford: European Civilization, II (Rome and Christendom, 1935); Rawlinson H. G.: Intercourse between India and the Western World from the earliest times to the fall of Rome, 1916; Rawlinson G.: Sixth great oriental monarchy, 1873; Reinach S.: La colonne trajane, 1886; Reinard M.: Relations politiques et commerciales de l'empire romain avec l'Asie Orientale, 1863; Robinson C. E.: History of Rome, 1935; Rostovchef: History of the Ancient World, II (Rome 1927); Rostovchef: La Syrie romaine (Rev. His., 176); Sewell R.: Roman Coins found in India (J. R. A. S., 1904); 『印度半島及大秦傳記』(新羅國11~12世紀) Sykes P.: History of Persia, I (1921); Vincent W.: Periplus of the Erythraean Sea, 1807; Warmington E. H.: Commerce between the Roman Empire and India, 1928; Yule H.: Cathay and the way thither (Preliminary Essay) 1913.